



Title	接触場面における話者交代
Author(s)	俣野, 夕子
Citation	阪大日本語研究. 1996, 8, p. 87-106
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/7087">https://doi.org/10.18910/7087</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 接触場面における話者交代

### Turn-Taking in Contact Situations

俣 野 夕 子

MATANO Yuko

キーワード：接触場面，話者交代，ゲストーホスト

#### 0. はじめに

「会話」は、当然のことながら、二人以上の参加者が交互に発話することで成り立っている。会話において発話権が移動することを話者交代 (turn-taking) というが、本稿では話者交代に焦点を当てながら、接触場面のコミュニケーションのありかた、とくに会話における参加者の意識構造と役割分担・会話展開の要因について論じ、さらに日本語教育との関連について触れたいと思う。

#### 1. 接触場面

ネウストプニー (1981)・Neustupný (1985) は、外国人学習者が参加する特殊な場면을「母語場面 (native situation)」「内的場面 (internal situation)」に対して「接触場面 (contact situation)」「外国人場面 (foreign situation)」と呼び、接触場면을母語場面と区別する主な要因を「外国人性」であるとしている。さらに「接触場面は母語場面とはかなりの点で異なった特徴をもっているために、目標としての母語場面だけを教育に取り入れることは現実的ではない」とした上で次の3点を研究課題としてあげている。

1. 接触場面の特色を学習者に教えること
2. その特色を学習者に利用させること

### 3. 接触場面から脱出する方法を教えること

今回扱うのは相手言語使用接触場面である（以下接触場面と略称）。

## 2. 話者交代

話者交代のシステムを研究対象として取り上げたのは Sacks らエスノメソドロジストであった。彼らは「日常それ自体から社会を検討する」という発想のもとに、社会的行為としての会話に注目して「会話分析 (conversational analysis)」を行った。Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) で行われた話者交代のモデル化では、話者交代は話者に割り当てられた単位である「交代構成単位 (turn-constructive unit)」が単位と単位の境目「移行関連場所 (transition relevance place: 以下 TRP) で交代するというシステムとして捉えられ、その際の優先順位に関するルールが提案されている。またこの話者交代のシステムは基本的に「状況の適切性 (conditional relevance)」という概念に基づいている。その典型的なものが Schegloff & Sacks (1973) による「隣接応答ペア (adjacency pair)」である。

西原 (1991) は、上にあげたシステムも含め、ひとつひとつのターンの関係に関する要因を「ローカルな会話展開要因」と呼んでいる。例えばターナーが誰から誰に、どのようなタイミングおよびやり方で受け継がれるのかということや、突然の飛び入り参加者の出現などに気を取られて脱線してしまうことなどがこれに含まれる。従来の話者交代の研究では、話者交代は局所的な（ローカルな）現象とされ、そのなかで話者交代のシステム (Sacks et al (1974) など) や、交代を引き起こすシグナル (Duncan (1974) など) についてローカルな観点から研究が行われてきた。

ローカルな会話展開要因に対して、会話のグローバルな枠組みの問題は「グローバルな会話展開要因」と呼ばれている。例えば「会話の目的・機能によって暗黙のうちに生じる会話のスタイルや展開に関する枠組み」がそれである。つまり会話の展開は我々の行動一般と同様に、社会文化的・経験知識的制約を受けている。参加者には会話全体が達成すべき「ゴール」

・会話展開の筋書きについての経験的予測「スクリプト」・筋書きどおりの展開を目指す会話し計画「プラン」があり、会話のターンの展開が全体としてのまとまりを持つためには、参加者によってこれらのグローバルな要因が共有されなければならない。この共有によって、会話展開にある種の期待が働き、会話に結束性が生じるのである。

本稿では、西原(1991)の意図と多少ずれが生じるかも知れないが、接触場面で外国人学習者がグローバルな会話展開要因を共有していない場合や、日本語能力が足りない場合に起こりうる問題を想定し、グローバルな会話展開要因を次のように二つに分けて分析を行いたいと思う。まず第一に会話し計画「プラン」の遂行という観点から、日本語母語話者と学習者のインターアクションを観察する。第二に「参加のルール」というものを想定し、観察を行う。参加のルールについて更に詳しく述べると、話者交代のシステムはひとつの「経済」と考えられ、参加者の属性によって発話権の配分にバリエーションが生じる。この発話権の配分は、裏返せば「会話への参加の量の期待」と考えることができる。この期待は社会的な制約を受けており、例えば「目上の人との会話では発話量を控えるべきだ」とか「目下の人との会話ではターンを譲ってあげた方がいい」のような暗黙のルールとして共有されている。また、この期待は発話のシチュエーションによっても制約を受ける。例えばAが「いい天気ですね。」と言ったのに対しBが「はい。」とだけ答えたとする。この返事は会話をローカルな観点から見た場合には隣接応答ペアとして成立しており、誤りではない。しかし、もしAがこれから会話を始め、発展させたいと望んでいるようなシチュエーションであれば、この答えは「不適切」と見なされる。「参加のルール」とは、このような参加者の属性および発話のシチュエーションによって決定される「会話への参加の量の期待」であると言える。母語話者が学習者に対してどのような期待を持っているか、また逆に学習者が母語話者にどのような期待を持っているかという意識構造と、それが会話の展開にどのように影響するかについての観察を行う。

以上述べたように、本稿ではシグナルの発信・受信などローカルなレベ

ルと、グローバルなレベルの双方の観点から会話の分析を試みることにする。

### 3. 調 査

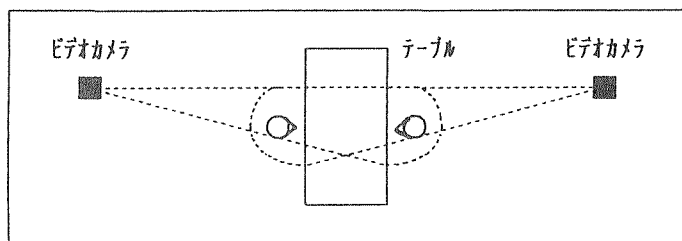
#### 3.1 調査方法

3名以上のグループの会話は構造が複雑になるので、1対1の会話に限定し、談話をビデオカメラで録画した。ビデオで録画した理由は、非言語行動がシグナルとして働く場合があると推測したためだが、今回は非言語行動の分析までは到らなかった。

また自然談話の場合、どちらかの参加者によるインタビューのような会話展開になる恐れがあるので、前半・後半部分にわけ、後半部分のみ両者が興味を持っているテーマを与えて、それについて自由に会話してもらった（データ1では「映画について」、データ2では「テレビドラマについて」）。

ビデオカメラと被調査者の位置関係は図1の通りである。発話者の表情、身振り、視線と相手の関係が分かるように、両者が画面に収まる配置にした。

<図1>



二つのデータは同一の状況で録画した。なお、録画の際、調査者は同席しなかった。

#### 3.2 被調査者

山崎・好井（1984）は話者交代のシステムを「順番取りシステム」とし

て捉え、社会的要因によって発話権の配分に不平等が生じることを示している。つまりバリエーションを考えなければならないということである。本調査では、外国人学習者の「外国人としての属性」によるバリエーションを調査するため、それ以外の変数はできるだけ統一する必要があると思われた。そこで今回の調査では、被調査者を同性・同年代（具体的には20才代前半の女性同士）のペアに限定した。また両者の関係は初対面か顔見知り程度とした。各被調査者に関する情報は表1のとおりである。

＜表1＞

データ1（1994年9月25日録画）

	出身地	母語	年齢	性別	日本語学習歴その他
F1	カナダ・バンクーバー	英語	22才	女性	教室での学習歴はないが、来日以来1年間週2回ボランティアに習っている。英語教師をしており日本語を話す機会は少ない。
J1	福井県福井市	—	23才	女性	大学4年生。F1とは初対面。

データ2（1994年9月28日録画）

F2	台湾・台北	中国語	23才	女性	日本語学習歴は台湾で4年間。留学生として来日して半年。日本語を使う機会は多い。
J2	兵庫県神戸市	—	22才	女性	大学4年生。F2とは同じ研究室に所属しているがお互い面識はなかった。

### 3.3 データの分析方法

前述したように、ネウストプニー(1981)は接触場面研究に有効なアプローチとして「問題分析」をあげている。本稿でも以下の点に関して問題分析を参考にし分析を行った。

- ・「外国人場面性」に対する意識を重視する・誤用以外のルールも対象とする

→フォローアップ・インタビューを重視する。

- ・参加者同士の相互交渉のあり方を重視する。

なお、文字化の際、メイナード（1993）を参考にし、表2の記号を用いた。

<表2>

、	確認できる発話の区切れ	(笑)	笑い
//	確認できるポーズ	(H)	headmovement の略で頭の縦振り（うなづき）
。	文末イントネーションが認められ、文法的に文と認められる発話が終わるところ		(S) shake の略で頭の横振り
↑	上昇調イントネーションが認められるところ		(G) gesture の略でその他の非言語行動
?	発話が聞き取れなかったところ	□	二人が同時に話し始めるところ

※(笑) (H) (S) (G) はあいづちと話者交代に関係すると判断したもののみ記述した。

またデータを分析する際、どこで交代が起こったかを決めるのは非常に難しい。というのは、あいづちと普通の発話を区別することが難しいからである。話者交代は実質的な意味を持つ発話を行う権利が移るときを指すわけだが、実際にどこで発話権が移動したかを特定するためには、まずあいづちとの区別を明らかにする必要がある。あいづちの定義は表現機能・表現形式に関して揺れているが、ここでは「発話の受け継ぎ」という観点から非言語行動や表情を含めず「あいづち的発話」として処理している杉戸（1987）の定義を援用した（杉戸1987参照）。杉戸は発話を「あいづち的発話」「実質的な発話」の二種類に分類しているが、話者交代とは「実質的な発話の発話権が移動すること」と考えられる。

#### 4. データ1の分析結果

##### 4.1 話者交代に関する被調査者の意識

自分の発話や相手に対する意識について、フォローアップ・インタビューの際に被調査者が述べたことを簡単にまとめておく。

F1からは、「J1 がゆっくり話してくれたので話しやすかったが『自分のペースに合わせてもらって申し訳ない』という気持ちがいつもあった。全体的に J1 にサポートしてもらったという印象がある。自分の日本語は非常に下手だと思う」という感想が得られた。

一方、J1 は、『外国人と話している』という意識が強かったため出来るだけ聞き役にまわった。F1 の発話が多少理解できない時も発話が終わるまで待つなど、全体的に余裕を持って接するように努めた。F1 が困っていそうな時は積極的に発話権を取った。また『質問-答え』というパターンが多くなったのは、相手のことを知りたかったためもあるが、難しい内容を避けようとしたからでもあると思う」と述べた。

#### 4.2 ローカルな観点から

ローカルなレベル、すなわち個々の交代のタイミングには、目立った違反(過度の発話の重なりや沈黙、割り込み等)は見られなかった。しかしフォローアップ・インタビューの結果、一見話者交代がスムーズに行われている箇所でも TRP の認識にずれがあることが分かった。以下に詳述する。J1・F1 の発話の内、ポーズをおいてさらに同じ話者による発話が続くもの、つまり Sacks et al (1974) の TRP のルールのひとつである「話者が次の話者を選ばず、発話する者がいない時、必ずと言うわけではないが話者は話し続け、交代構成単位が拡張される」というルールに従っているように思われる箇所について以下のようにフォローアップ・インタビューを行った。

- (i) 自分の発話については、ポーズの場所で発話を終了するつもりだったか(終了シグナルを発信したか)。
- (ii) 相手の発話については、ポーズの場所で発話が終了したと思ったか(終了シグナルを受信したか)。

その結果、J1 の発話では(i)・(ii)すべてが一致し両者が TRP だと認めていたが、F1 の発話では9か所(前半5+後半4)で J1 と F1 の意識が一致しなかった。つまり F1 は発話終了シグナルを発信したつもりだった



が、J1 がそれを受信しなかったということで、F1 はシグナルの受信能力は高いが、発信能力はあまり高くないと考えられる。

9 例を分析するため J1 のフォローアップ・インタビューを行った結果、次のような原因が考えられた。

- ①文末イントネーションとしての「抑え」が足りない。
- ②文末表現が乏しい。
- ③内容面で J1 の要求を満たさない。
- ④「いいきりの時はまだ発話途中」という仮説を J1 がたてていた。

当初、ずれの原因は①②のような F1 のシグナルの発信が原因だと考えていたが、③④のような場合 J1 の受信が問題になっている。つまり接触場面では母語話者は学習者の個々のシグナルに反応するだけでなく、学習者の発話を評価しながら話者交代を進めている。このような評価は母語場面にも見られるが、接触場面では質も異なるし、数も多いと考えられる。とくに④のように相手の日本語能力を評価し仮説をたてるということは母語場面では見られない。この評価は③④のように TRP のずれを引き起こすなど話者交代を妨害する場合もあるが、逆に話者交代を助ける場合もある。後に詳述する。

なお学習者側の原因はイントネーションや文末表現など会話のセマンティックな部分に関わる素材教育（畠 1988）によってかなり克服しうると思われる。

#### 4.3 グローバルな観点から

F1 の発話の問題点は、参加のルールに違反するものは見られず、すべて内容面で状況の適切性に違反するもの、つまりプランがスムーズに遂行されず結束性が欠如してしまうという問題だった。このような問題点は全部で 6 例見られ、以下の 3 パターンがあった。

- ①J1 の発話が理解できず新しいトピックに移る場合（前 1 + 後 1）
- ②J1 の発話は理解していたが、無視して新しいトピックに移る場合（前 1 + 後 1）

③自分の発話途中、文脈をはっきりさせずに少し違うことを言う場合（前2）

①は理解まで到っていないため、聞き返しの交渉が必要となるが、②はJ1の発話意図に応じた発話をするに、③は文と文との結束性を持たせることに失敗した例である。J1はどの場合も突然の転換で驚いたと言っており、客観的に評価しても「誤り・逸脱」と受け取ることが出来る。しかしF1自身は②③に関してフォローアップ・インタビューの際、自分の発話をもう一度聞き、突然違う会話に移っているように聞こえることに気付いたが、会話中「誤り」とは認識していなかった。発想としては無関係な話をしたわけではなく、単に発話と発話、文と文との関係を明らかにできなかっただけで、自分に適切にそれぞれの関係を明らかにできるほどの日本語能力があれば何ら問題にはならなかっただろう、と述べている。

また、F1はトピックの提出に二度失敗している。後半部分の「映画について」の会話が始まった直後、F1は日本の映画は高いということについて触れ、カナダではいくらだと思うかとJ1に尋ねている。

<談話資料1>

J1	えー、千円くらい？	もっと安いの？	八百円くらい？	五百円
F1		(G)	うん	(G)
J1		あ、ほんとー、へえー		
F1	うん、五百円ぐらい。		そういいですね。だからす	
J1	うんうん		うんうん	三倍ぐら
F1	ごい、	びっくりしま、びっくりしました。	うん	
J1	い？	うん		ああ、見てな
F1	そうね。	でも、 <u>うんトゥルー、トゥルーライズ、</u>		
J1	い。		見たい？	え、どういう映画が好
F1		<u>まだ見てない。でも見たいです。</u>	(H)	
J1	きなんですか？			
F1		んー、色々。ロマンス、アクション、エスエフ。		

このときF1には値段の話を経て『トゥルーライズ』という自分が見たかった映画をトピックにしようというプランがあった。そこで「映画の値段は高いがトゥルーライズは見たいんです」の意味で下線部の発話を行いトピッ

クを提出したが、J1は気付かず「好きな映画のジャンル」にトピックを変えてしまった。F1は会話の終盤で再度取り上げたが同様に失敗している。J1はフォローアップ・インタビューではじめてF1がトピックを提出したことに気付いたが、会話中はそれほど重要だという印象は受けなかったと言う。新しいトピックを提出するためには、構文的なとりたてや終助詞などによる働きかけが必要なようだ。

以上のように、グローバルな観点から分析すると、F1がJ1のプランを邪魔したり、F1自身のプランが遂行できないという問題が起きている。しかし前者の場合は、J1がF1の誤りを即座に訂正せず、しばらく話を聞いてからその流れに合わせるようにしたことによって、後者の場合は、F1がトピックの提出にこだわらず会話の流れを重視したことによって、大きな問題とは認識されていない。このような両者が強い訂正を避け譲歩しあい会話のスムーズな流れを優先する状況・関係については、後に詳しく検討する。

なお、これらの問題が生じた原因は文と文、発話と発話の関係を明らかにできなかったこと、新トピックの提出のためのとりたてや働きかけができなかったことである。従って、結果としては会話の大きな枠組みの問題となっているが、接続表現やとりたて助詞、終助詞などの素材教育で克服しうられると思われる。

#### 4.4 接触場面性に対する意識と役割分担

J1はフォローアップ・インタビューで、外国人性に対する意識が強かったためできるだけ聞き役にまわり、余裕を持ってターンを取る、F1が割り込みをしたらターンを譲る、F1が困っているときは割り込みをしてもよいなどのルールを設定したり、「いいきりの時は発話途中」という仮説をたてたと言っている。このように母語話者は学習者の発話を評価し、それをフィードバックさせながらコミュニケーションを円滑に行えるような「フォリナートーク的な会話のルール」を組み立てており、上に述べた「いいきりの時は」という仮説などローカルなものから、役割分担や割り

込みの許容などグローバルなものまで見られた。このルールはときに TRP の認識のずれの原因になっていたが、大体において話者交代を成功させていた。

また、F1 もローカル・グローバル両面で話者交代を成功させる努力をしている。ローカルなレベルでは、F1 は発話途中でターンを譲りたいとき「そう・うん」などの言葉や笑いをシグナルとして発しており話者交代を成功させている。J1 はフォローアップ・インタビューで日本人がこのようなシグナルを発した場合は「ごまかしている」とマイナス評価するかもしれないが、F1 の場合はターンを譲ってくれたとプラス評価したと言っている。また、スピードを遅くする、発話終了部分の音量を下げる、言葉をごまかすなどの方法も取っており、いずれも話者交代は成功している。グローバルなレベルでは F1 は自分のプランに固執せず会話の流れを優先させている。そのような努力・譲歩により J1 とのトラブルが回避されている。

このような両者の行動を引き起こしたのが「接触場面性」に対する意識であると考えられる。J1・F1 とともに接触場面性に対する意識が非常に強く、相手に対する配慮の気持ちが働き、J1 は F1 をサポートするという役割を、F1 はサポートされる役割を担っている。つまり接触場面性に対する意識が会話における役割分担を期待させ、その期待が一致した結果、両者の間に「ゲスト・ホスト」という関係が生じたのではないだろうか。

Marriot (1984) は、接触場面（英語母語話者と日本人英語学習者）の会話展開をトピック・サブトピックの提出を通し考察している。結果としては、学習者はトピックの提出にあまり熱心でなく、英語母語話者は沈黙を少なくするようにトピックをたくさん提出したとされ、「英語話者が学習者の英語教師であったため、あるいは学習者がゲストとして会話に参加したためという可能性もあるが」とことわった上で、「日本語が沈黙に対して寛容であるため」と説明している。しかしデータ 1 ではトピックの提出の約 64% を J1 が行っており、この説明が必ずしも正しいとは言えない。データ 1 を更に詳しく見ると、J1 による提出は前半 71.4%、後半 50% と

なっている。この数値の差はテーマの有無によると考えられる。J1はフォローアップ・インタビューで「難しい内容は避けた」と言っており、実際、前半のトピックはF1の仕事など話しやすいものが多かった。つまりデータ1ではトピック提出がJ1によって恣意的に行われていると言える。ホストとしてのJ1はこのような枠組みを設定することでF1の困難さをあらかじめ排除し、さらにF1の日本語を常にモニターしながら「フォリナーとしての会話のルール」を組み立てている。一方、ゲストとしてのF1はJ1の主導権を認め、その結果、恣意的な枠組みの中ではあるが情報交換が促進されている。

#### 4.5 まとめ

以上のことからデータ1の会話展開の主な特徴として以下の点があげられる。

- ①ローカルなレベルでは、F1が発話を終了した箇所で両者のTRPの認識がずれるという問題が見られた。
- ②グローバルなレベルでは、F1がJ1のプランを阻害する、F1自身のプランを遂行できないという問題が見られたが、両者の譲歩によってカバーされている。
- ③両者ともにローカル・グローバルなレベルで、会話をスムーズに行う努力をしている。
- ④両者とも接触場面性に対する意識が強く、役割分担の期待が一致した結果「ゲストーホスト」の関係が生じている。そのため強い訂正を避け譲歩しあう関係・状況ができあがり、会話の展開が優先されている。

### 5. データ2の分析結果

#### 5.1 被調査者の意識

F2の報告によると、「話しやすかったが、初対面だったのでいつもより口数が減った。日本語を使うことで緊張したとは思わないが、台湾人の友人と中国語で話すときよりは口数が少なかったと思う」ということであっ

た。

J2は、「全体的に会話はうまく運んだと思う。話し始めてしばらく経ったときのF2の日本語に対する評価が高かったのも、いつも友人と話すときとほとんど同じ調子で話した。外国人と話しているという意識はあまりなかったが相手が困っていそうなときや沈黙が続いたときは『リードしなければ』と感じた。F2の発話が少ないことに関しては、大体的場合特に何とも思わなかった」という感想を述べた。

## 5.2 ローカルな観点から

データ1のようにTRPの認識がずれるなどシグナルに関する問題とはくに見られなかった。F2自身、フォローアップ・インタビューで文末のイントネーションや声量には普段から気を配っていると言っている。

しかしJ2が原因となっている問題が多く見られた。例えば、J2がF2の発話を誤解したり、F2の発話中に「先取り」や「割り込み」を頻繁に行うといった問題であるが、これらは客観的に判断して接触場面に特有であるとは言えないものの、F2が訂正をしていないという点で目立っていた。

まずJ2がF2の発話意図や発話内容を誤解してしまった例が4例見られた。どの場合もF2の発話には文法やイントネーションの大きな間違いはなく、母語場面でも生じる程度の問題であるが、F2は4例のいずれも訂正していない。以下はその例である。

### <談話資料2>

J2		あの、わたしも
F2	卒業、文、という、あの、何字ぐらい、必要ですか。	
J2	よく分かってないんですけど、	ワープロで、こうつと、普通のこの
F2	うん	
J2	サイズありますよね。ノート開いてB4。	で15、6枚じゃないかと
F2		(H)
J2	かってAさん前言ってましたけどね。	うん、なんかBさんか
F2		Aさんが?
J2	Aさんが、なんかそんなもん、あBさんかな?	なんかそんなもんだ
F2		(H)

J2	よとか言っていましたよ。	(H) // まあ、ねえ、お
F2	ああ (H) そうですね。	(H)
J2	正月ゆっくりできないと思いますけどね。	(H)
F2	(H) でも…	

F2は「Aさんが」の続きを要求していたが、J2には理解されなかった。結局F2は会話の内容が分からないまま聞き流すことにし、聞き返しはしなかった。

次にJ2の先取り・割り込みに対するF2の反応の問題であるが、J2は先取り・割り込みを頻繁に行っており全部で22例見られた。(この二つは本来別々に考えるべきだが、フォローアップ・インタビューで各々の発話意図を質問していないため単純にF2の発話を妨げるものと考え、区別しないことにした。) J2の親しい友人の話では、J2は普段から先取り・割り込みをよくするという。また、F2のフォローアップ・インタビューの結果からも、今回の談話でこれらが頻繁に見られたのは、J2の「接触場面性」に対する意識が低く、F2に対しフォリナートーク的な会話のルールを用いなかったことの現れであると言える。これに対しF2は、22例のうち16例は「その場に適切だったので助けられた」と受け取っているが、残り6例は「言葉がまとまらなくなり混乱した」「言いたかったことを言うチャンスを失った」とマイナス評価しているが、そのいずれの場合も訂正をしていない。

以上のように、F2は会話の相互交渉つまり聞き返しや訂正にあまり積極的でない。トラブルが起きて不満を感じた場合でも訂正せず、J2の割り込み・先取りに対しても受動的でさえある。一方、J2は接触場面性に対する意識が弱いためフォリナートーク的な会話のルールは用いず母語場面とほぼ同じルールを使用している。このような意識のずれが相互交渉を妨げていると考えられる。

### 5.3 グローバルな観点から

データ1とは異なり、内容面で状況の適切性に違反しプランの遂行に支

障をきたすということは見られなかった。しかし参加のルールを想定した場合、問題と考えられる箇所がいくつか見られた。

「5.1 被調査者の意識」でも述べたように、J2はF2の発話が少なくても不快感を感じたりイライラすることはなかった。しかし会話中J2がF2にターンを譲り、さらに会話が展開することを期待していたときF2があまり協力的でなかった場合は、やや期待を裏切られたように感じたという(3例)。例えば次の会話でJ2は新たなトピックを提出しF2に働きかけている。

<談話資料3>

J2	(神戸について)	あ、全然ちがいますよ。
F2	異人館? みたいな感じですか?	(笑)
J2	異人館は特殊ですからね、うん、特別。//うん、あそこだけですな、	
F2	(H)	
J2	神戸でも。(H)そうですねー、うん。	
F2	(H)	そう、すごく気に入るから大
J2	ああほんとに一。(H)うんまあ、いろんな所あるしね、	
F2	好きです。(H)	(H)
J2	また、ゆっくり。//ねえ、京都とかはわりと行きました? やっぱ	
F2	(H) (H)	(H)
J2	ちゃんと行ってますね。(H) (H)	
F2	(H) (H)	でもいっぱいありますけどね。
J2	うんうん、全部まわりきれないですよ。わたしも、大学生になっ	
F2	(H)	
J2	たら色々行こうと思いつつ、結局清水寺とか平安神宮とかそんな、ね、	
F2	(H)	
J2	有名どころしか行ってなくて、うん、あまり行ってないですね。	
F2	(H)	
J2	(H)	あ、行きました?
F2	(H) //あの、祇園さい、は (S) 行かなかった、けど、	
J2		
F2	でも……	

J2は、神戸観光についてのトピックが終わったのでF2が話しやすそうな「京都について」というトピックを選び提出したが、予想・期待に反し



F2が充分に反応しなかったのがっかりしたと言う。何度かターンを譲りF2が祇園祭についてターンを取ったときは安心したそう。自分のプランに沿った会話展開が始まったからであろう。

他にF2が提出したトピックをJ2が積極的に支持しさらに展開しようとしたときも、F2があまり反応しなかった場合J2は不満を感じている(2例)。

<談話資料4>

J2 F2	(俳優について)// うん、コマーシャルにはよくでてますよね。 あ の コマ
J2 F2	うん ーシャルも見ます。 そう、でも分からないコマーシャルもたくさんあ
J2 F2	うん 引っ越 りますけど。 ある引っ越し会社の、コマーシャルですが、サカイ、
J2 F2	しのサカイですか？ あ、そうそうそう何を言っているのか全然分かりませ
J2 F2	ああ、あれはちょっとねえ。 あれ、あの沈んだりす ん。 おもしろいですか？
J2 F2	るやつですか？水の中に。(G) //前は勉強しまっせでしたけどね。 (H)
J2 F2	引っ越しのサカイとか言っていましたよねえ。 何て言っていましたっ ああ (H)
J2 F2	けね、今回は。//あの沈んだりするの。いつも大阪弁ですねえ。 ああ
J2 F2	なんかずっといっつも勉強しまっせって言ってて (H)

J2は、F2があるコマーシャルに興味を持っていたので、そのトピックの展開に協力しようと努めたが、F2はそれにあまり協力的ではなかったの  
でターンを取らせようと何度も試みている。F2はこれらの箇所に関し  
「特にコメントがなかったから発話しなかった」と説明しているが、「同じ  
台湾出身の留学生のSさんとだったら何か言ったと思うか」という質問に  
対しては「何か話したと思う」と答えた。これは本人が初対面だったから  
と主張していることもあり、参加者の性質に左右される部分も大きいと思

われるが、J2が不満を感じたことは事実であり、参加のルールに違反していると言ってもいいだろう。少なくとも日本語会話では、参加者の属性がほぼ同じ場合、会話にはほぼ同程度に参加することが期待されていると考えられる。また、特に自分が提出したトピックに関して話している場合や、相手から積極的に働きかけのあった場合は、会話への参加・協力が強く要求されるのではないだろうか。このような場合の「過少参加」は不適切と見なされる可能性が高い。

#### 5.4 接触場面性に対する意識と役割分担

データ2のトピック提出の割合を見ると、F2による提出が全体で53.3%（前半55.6%，後半50%）でF2とJ2はほぼ同程度に貢献していることが分かる。J2はF2の話しやすいトピックを選ぶこともしておらず、F2とJ2の間には「ゲストーホスト」の関係は成立していないと言ってもよいだろう。しかし上述した結果から、「ゲストーホスト」の関係は成立していないものの役割分担の期待にずれがあるように思われる。というのは、J2の接触場面性に対する意識が低く「F2をサポートしよう」というホストとしての意識がほとんどないため母語場面のルールを多く使用している。一方、F2は過少参加になる場面も見られたように、参加の姿勢がいくぶん受動的である上、訂正や聞き返しといった交渉をしないなど相互交渉にあまり協力的ではなかった。会話終了後、F2はプランが遂行できなかったことに関してJ2への不満を感じているが、自分が交渉に積極的でなかったことの責任は感じていない。つまり、F2はJ2にホストとしての役割を期待していたわけである。しかし期待が一致しなかったため、J2による配慮もF2による交渉も少なくなり「情報交換の場」としての会話の運営に問題が生じたのだろう。

#### 5.5 まとめ

以上のことからデータ2の会話展開の主な特徴として以下の点があげられる。

- ①グローバルなレベルでは、F2がJ2の期待する「参加のルール」に違反

し、「過少参加」になっている。

②F2による訂正がほとんど見られず、相互交渉が活発でない。

③J2とF2の意識構造にギャップがある。

(J2は「接触場面性」に対する意識が低く、概ね母語場面のルールを適用している。一方、F2は「接触場面性」に対する意識が強いため、情報交換にあまり協力的でなくやや受動的な面がある。)

## 6. 結 論

以上、接触場面の話者交代・会話展開の構造について、参加者の意識構造を重視しながら調査・分析を行ってきたが、分析の結果から分かったことを以下に列挙する。

①話者交代はローカル・グローバルの二つの観点から分析や教育を行う必要がある。

②接触場面の話者交代には接触場面性に対する意識と、それによって生じる役割分担が大きく影響している。

(接触場面性に対する意識が強い場合ゲスト・ホストという役割分担の期待が生じる。この期待が一致すると、あらかじめトラブルが回避されプランが遂行されやすいが、期待にずれが生じた場合情報交換が阻害されプランの遂行が困難になる。)

③他のルールとの重なりが見られる。

(話者交代をグローバルな観点から見ると、聞き返しのストラテジーなどと一連となって初めて「会話計画の遂行」を達成する。)

最後に日本語教育ではどのように取り上げるべきかについて簡単に述べたい。

### 1) 素材教育を強化する。

シグナルの発信・受信と、会話の結束性を高めるために素材教育を重視する必要があるが、今回はとくに終助詞、とりたて助詞、イントネーション、接続表現が問題になっていた。これらは初級の段階から教育に取り入れる必要がある。

2) プランの遂行のための教育を行う。

会話を「情報交換の場」と捉えると、会話全体の運営つまりプランの遂行が目的と言える。したがって話者交代のストラテジー教育を行うとすれば、聞き返しのストラテジーなどとの関連を図る必要があるだろう。

3) 「参加のルール」に触れる必要がある。

望ましい発話量について母語場面での期待と接触場面での期待の両方に触れ、学習者が自分の「外国人としての属性」について認識しておく必要がある。とくに「ゲストーホスト」という関係が生じる可能性とその場合の特殊性を知り、利用する必要がある。

参考文献

今石幸子 (1993) 「談話分析によるあいづちのモデル化の研究」 大阪大学未公開  
修士論文

杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相』国立国語研究所

西原鈴子 (1991) 「会話の turn-taking における日常的推論」『日本語学』10-10

ネウストブニー, J. V. (1981) 「外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』  
45 号

————— (1982) 『外国人とのコミュニケーション』岩波新書 215

畠 弘巳 (1988) 「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」『日本語  
学』7-3

ファン, S. (1995) 「接触場面と言語管理」中間言語研究会

堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』  
64 号

水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』7-12

メイナード, 泉子 K. (1993) 『会話分析』くろしお出版

山崎敬一・好井裕明 (1984) 「会話の順番取りシステムーエスノメソドロジーへ  
の招待ー」『言語』13-7

山田美樹 (1991) 「談話分析における非言語行動の側面ー談話の進展と首振り  
動作・視線の関係について」大阪大学卒業論文

Brown, G. & Yule, G. (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge University  
Press.

Coulthard, M. (1977) *An Introduction to Discourse Analysis*. Longman

Inc.

Duncan, S. Jr. (1974) On the structure of speaker-auditor interaction during speaking turns. *Language in Society* 3-2, pp. 161-180.

Hatch, E. M. (1983) *Psycholinguistics, A Second Language Perspective*. Newbury House Publishers, Inc.

Marriot, H. (1984) *English Discourse of Japanese Women in Melbourne*. Japanese Studies Center, Melbourne.

Neustupný, J. V. (1985) Problems in Australian-Japanese Contact Situations. *Cross Cultural Encounters: Communication and Miscommunication*. River Seine Publications.

Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50, pp. 696-735.

Stubbs, M. (1983) *Discourse Analysis*. Basil Blackwell Ltd.

(日本語版『談話分析』研究社出版, 南出 康世・内田 聖二共訳)

(元大阪大学文学部日本語学, 応用日本語学)